

2025 年度 特別の教育課程の実施状況等について

1 管理機関による特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

宮城県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
聖ウルスラ学院英智小・中学校	学校法人 聖ウルスラ学院	私立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
聖ウルスラ学院英智小・中学校	https://www.st-ursula.ac.jp/concept/tokurei/

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
聖ウルスラ学院英智小・中学校	https://www.st-ursula.ac.jp/concept/tokurei/	https://www.st-ursula.ac.jp/concept/tokurei/

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- 計画通り実施できている

 - ・一部、計画通り実施できていない
 - ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

特になし

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- 実施している

 - ・実施していない

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

聖ウルスラ学院英智小・中学校は、21世紀を見据えた教育の実現に向け、特別に編成した教育課程を実施している。これに伴い、自己評価および学校関係者評価の結果を踏まえ、教育活動や評価方法の改善に関する研究を継続的に行っている。

また、全国規模の模擬試験や全国学力・学習状況調査の結果等から、児童生徒の学力の定着状況が確認されており、本教育課程の実施による効果が確認できている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

聖ウルスラ学院英智小・中学校は、学校教育目標の具現化に向け、小中9年間の一貫教育を基盤として、縦の系統性および教科横断的な関連性を踏まえた指導計画を作成し、教育活動を実践している。

これらの取組は、学校教育法等に規定される教育の目標に照らして適切である。また、学習指導要領に定める内容についても的確に把握し、教育課程全体の適切な管理・運営が行われていることを確認できている。

5. 課題の改善のための取組の方向性

聖ウルスラ学院英智小・中学校の教育活動については、保護者や地域住民から一定の評価を得ていることが、各種アンケート調査の結果から確認できている。一方で、教育課程特例校としての特色ある学びやその効果の発信については、引き続き課題が見られる。この点については、ホームページやスクールガイドの見直しに加え、ブログやInstagram等を活用した情報発信を推進しており、前年度と比較して改善が見られる。

当校は、2004年に教育課程特例校として認定されて以降、児童生徒の実態に応じて教育課程の改善を段階的に進めてきた。しかし、認定から20年が経過した現在、社会の変化や時代の要請を踏まえ、教育課程全体の見直しが求められている。このため、2025年度より教育課程の一部改訂を実施した。本改訂は、特色ある教育（「宗教科」「言語技術科」「英語科」「仲間・共生」「地球市民」）の時数確保および隔週5日制の導入を踏まえつつ、これまでに育成してきた資質・能力を基盤として、各教科等の時数を適切に再編成し、教育目標の達成を目指すものである。なお、本改訂は教員の指導力向上を図るための研修および実践と一体的に推進することを前提としている。

2 学校における自己評価

1. 実施の効果及び課題

本校は「確かな学力の保障と人間性成長の保障 両全の教育」を目指し、特別の教育課程を編成し、以下のような独自の教科等の実践を行っている。

【独自の教科等】 * () 内は週当たりの時数 *7~9年生は中学1~3年生

宗教科：1~9年生 (1h) 道徳に替えて

言語技術科：1~9年生 (1h)

英語科：1~2年生 (1.5h) 3~4年生 (2h) 5・6年生 (3h)

PC英語：1~6年 (0.5h) 7~9年生 (0.5h)

仲間・共生：3・4年生 (1h) 5~7年生 (1h)

地球市民：8・9年生 (1h)

【上位学年の学習内容の先取り】

数学：6年生後半から

【削減している教科等】

国語：1~2年 (1h) 3~4年 (0.5h)

総合的な学習：3~9年生 (2h)

本校では、義務教育9年間を通して児童生徒の発達段階を踏まえ、独自の教科等を含む各教科等を体系的・系統的に編成した教育課程を設定している。また、隔週6日制の採用や、7年生以上における7校時までの時程の設定により授業時数を十分に確保するとともに、スパイラルに学習活動が展開されるよう、9年間を見通した各教科のシラバスを作成している。これらの取組に伴い、一部の教科等の時数を削減しているが、教科横断的な探究型の学習を積み重ねるとともに、それらのまとめとして位置付けている「仲間・共生」「地球市民」や体験学習・宿泊学習等の活動を充実させることにより、削減による影響を補完し、十分な教育効果が得られている。また、すべての学習活動の基盤となる「ことばの力」の育成を目的として設置した独自教科「言語技術科」における学びは、論理的思考力や表現力の育成の観点から、児童生徒の学習活動全般に汎用的に活用されている。この「ことばの力」に重点を置いて取り組んだ2025年度の研究「力強く挑戦し続ける子どもを育む」においては、各教科等における「探究的な学び」を中核とした授業改善に全校的に取り組んだ。その結果、児童生徒が根拠を基に自らの考えを表現し、他者との対話を通して学びを深める姿が見られるようになるなど、主体的に学習に取り組む態度の育成が進んでいることが確認されている。

今後は、本年度の取組により形成された学習の枠組みや試行錯誤を重ねる姿勢を基盤として、児童生徒一人一人の自律的な問いを重視した学びへと発展させ、本校独自の教

育課程の一層の充実を図っていく。これらの学習活動の充実を図るため、教員の指導力向上が重要である。本校では、年間を通して校内研究会、公開研究会、言語技術研究会、教員研修会等を計画的に実施し、児童生徒の心のケアの在り方も含めた指導力の向上および授業改善に取り組んでいる。これらの取組は児童生徒の学力向上につながっており、その成果は外部模擬試験や全国学力・学習状況調査等の結果にも表れている。

2025年度より教育課程を一部改訂し、新教育課程となって1年が経過した。新たな教育課程における5領域の構成や教科設定の有用性、各教科の授業時数の妥当性、先取り学習の有効性等については、今後も継続して検証を行い、改善を図っていく。

2. 課題の改善のための取組の方向性

前述の課題を踏まえ、本校の特色を生かしつつ、時代のニーズに対応した組織的な教育課程編成に向けた取組を推進する。その際、最も重視すべきは「児童生徒の学力の保障と人間性の成長の保障を両立する教育の実現」である。

改善に向けて、以下の3点について教育課程の見直しを行う。

○教育課程における5領域および教科設定の有用性

- ・5領域が実効性のある教育活動として機能しているか
- ・独自の教科を含め、教科の設定が適切であるか

○各教科の授業時数の妥当性

- ・各教科において、学習内容の習熟に必要な時数が確保されているか
- ・時数が確保されている場合、そのより効果的な活用方法が図られているか

○先取り学習の有効性

- ・発達段階に応じた適切な学習内容となっているか
- ・年間指導計画に過度な負担が生じていないか

土曜日（隔週）および7年生以上における1日7時間授業を実施している本校において、より効果的・効率的な学習方法の導入も含め、教育課程全体を総合的に精査・検討し、さらなる改善を図っていく。